

山蛭

大阪府立八尾高校 2年 間部 賢社

少し前、知り合いが東京に行ってきた。お土産に東京バナナと土産話をいくつか貰った。嫌なものでもなかったのでありがたく頂いておいた。

東京は物価が高いから少し都心から離れたところに泊まったらしい。高級ホテルとかでは無くて旅館と言うか民宿と言うか、というような所で、老夫婦が二人で細々とやっている旅館らしい。客が知り合いの一行だけだったこともあり、婆さんが色々話してくれたそうで、戦時中のことも聞いた。

婆さんは今年の6月に86歳になつたらしい。わかりやすく言うと「東京ラブソデイー」が流れた年だと教えてくれた。そんな歳にもなつてタメの爺さんと二人きりで旅館とは大丈夫かと思つたが、どうやってお店を営んできたかはさて置かしてもらふことにする。

婆さんは生まれも育ちも東京の、根つからの江戸っ子で、旅行と疎開以外ではただの一度も東京を出たことがないのだと。

疎開は縁故疎開で、母方の叔母一家が住んでいた長野に行つていた。母方の叔母とその旦那、こども、旦那の両親のひっそりとした三世帯で、キヨと云う当時としても少し古風な名の、叔母の一人娘は婆さんと同じ年で、すぐに仲良くなつた。親戚の子供ということもあり、当時で見るとそこまで不自由はなかつた。キヨ共々学童疎開の子よりかは大分贅沢な暮らしをさせてもらつた。終戦までの一年半程を長野の地で暮らした。

思い出の中の二度の長野の夏は涼しげだ。二度目の夏は終戦で東京に帰るだのどうので慌ただしかった。したがつて長野の夏となると一度目の夏が思い出される。

叔母たちの家に厄介になつてから半年ほどが過ぎた。稲にも花が咲き始める頃合い、キヨとかすもみを作つてるとキヨが、こないにあつきたい日は山蛭が出る、と言つた。山蛭に聞き馴染みが無かつたから聞き返すと、一年で一番暑い日に出る蛭だと。他よりも一回りも二回りも大きくて、時期も遅いそう。夜遅くまで起きてりゃ見られると言ふんで、二人して夜更かししようと言ふことになつた。

いつも通り夕餉して、そのあとは直ぐに蚊帳の中に入った。大人が寝静まるのを待っていると段々うとうととしてくる。目を越したあたりか、キヨが肩を叩いて起こしてくれた。虫の声以外は何の音もない。叔母たちが寝たことを確信して抜き足差し足忍び足で外に出た。なにぶん木造だから体重をかけるだけで木が唸りをあげる。ひやひやしなから二人、家を出て闇に入った。何が鳴いているのか、賑やかなもので、キヨは虫の声の真似をしていた。そうやって畦畔をてくてく歩いてると、何か光るものがある。あれが山蛭かと聞くとそつたと答える。山蛭はあちこちにいるようで、ここは一つ捕まえてみようということになつた。網も籠も無かつたが、場所はすぐにわかるし、捕まえてどうかするつもりもなかつたから、まあいいやという

ことで、履物を脱いで裾をたくし上げて田圃に入った。

近づけば近づくほど光は大きく明るくなってくる。これは本当に蛍なのかと思った。田圃を一つ横切った畦畔に生えて居る露草に拳大の光が止まっている。見ても光しか見えない。両手で包むように取ってみると確かに何かいる。キヨと覗き込むと、ぼんやりとした丸い光だった。よくわからないので手を少し開くと、それはするつと出てきた。キヨは飛んで行こうとしたそれをパツと掴んだ。力が強過ぎたのか、握りつぶしてしまったようで、光は四散した。婆さんもキヨもあれは蛍ではないと言いつつた。考えても皆目見当もつかなかったので、家に帰ることにした。田圃を回って履き物履いて、来た道で帰つた。家人に気づかれないように足を洗ってまた床に就いた。けれども寝ようと思つても気持ちが悪揚しているのか、さっぱり寝付けない。隣の布団を見てみると、キヨも同じように眠れないようで、あつちを向いたりこっちを向いたり寝返りをうっていた。小さな声でおいと呼びかけるとすぐに目が開いた。あれの正体がわからない、しかし知りたいということで囁き声で話し合つた。そうしているとだんだん眠くなつて来て、いつの間にか眠りについていた。

夜更かしの弊害か、起きたのは日も高くなつてからだった。枕元に濡れたタオルが落ちていた。隣を見ればキヨも全く同じ時分に目を覚ましたようで、二人連れ立つて居間へ行った。台所には叔母がいた。何やら切つていたが、こちらに気付くと大丈夫かと問うた。キヨと目を合わせて大丈夫だと言つたが、何のことかわからないので、聞くと二人して高熱で丸一日寝ていたらしい。山蛍のことは何故か言わないほうがいい気がして黙つていた。

知り合いはこれで終わりだと言つた。お前は山蛍が何かわかるかと聞かれたが、怪火だということしかわからないと言つと、そうかと言つて東京バナナを一つ食べた。